

他専修の受講生に対応した「絵画研究」の試み

美術教育講座・東 慶太郎

1. 授業の概要

この授業は、教科教育専攻 美術教育専修（1年次開講）の教科内容に関する科目である。履修の手引の「授業科目の概要」には次のように記載している。

「印象派から立体派までの代表的な作品をとりあげ、それぞれの表現手法を分析することによって、近代絵画における空間のあり方を考察する。あわせて制作実習をおこない、絵画空間の性質とその独自性についての理解を図る。」

この記述は、大学院生の経歴の違いや研究能力の差、授業内容への多様な要望などに柔軟に対応できるよう配慮したものであり、時間的な点から言っても、実際に理論研究と制作研究を併せた総合的な絵画の授業が展開できる訳ではない。これまでの本授業における受講生のレベルを思い返してみると、学部で絵画を中心に研究し、一定の知識・能力に達している者がいた反面、過去に美術を学んだ経験がなく、学部以下の能力と判断せざるを得ない現職教員や留学生等まで、受講生の能力レベルはきわめて多様であった。この問題は、いくつもの分野を幅広く履修しなければならない教育学研究科特有の問題であり、根本的な解決は困難であろう。とはいえ、このような問題を踏まえた上で、受講者個々の能力・資質のみならず、各々の研究テーマを尊重し、それぞれの要望に沿った柔軟な対応をおこなうことが本授業にとっての重要な課題であると考えられる。

本授業の受講希望者は、今年度は音楽教育専修の学生1名のみであった。特異な事例であり、その報告という意味合いで昨年度と同じく本授業をとりあげた。

大学院の授業では、最初のガイダンスの際に、受講者が取り組んでいる研究テーマ（修論テーマ）・本授業でおこないたいと考える研究内容等

を確認している。

今回の受講者の研究テーマは、19Cフランス音楽（フォーレ等）であり、ドイツロマン派とは異質なその特徴を考えるなかで、同時代のフランス美術（印象派）に関心をもったということであった。その結果、本授業は制作ではなく、モネ、セザンヌを中心とした印象主義絵画に関連する理論研究をおこなうこととした。

2. 授業内容と感想

授業は、前もって渡しておいた絵画作品のカラーコピーをもとに鑑賞レポートを提出してもらい、授業者はその内容に沿って、具体的な画面分析などを含む総括的講義をおこなうこととした。今回の受講生は、美術の専門ではないが、一般的な美術に関する知識・教養は身に付けているように感じられ、ほぼ毎回のように課した鑑賞レポートについてもある程度の質を維持していたように思う。また受講態度もきわめて良好であった。しかし、今回の受講理由は、絵画の専門的知識を身に付けることではなく、音楽における時代や国（地域）による考え方や感覚の違い、様式の変化などの根拠を考察する一環として、同時代に展開された美術の動向や思想についても考えてみたいということであった。

授業者としては、受講生の専門分野にもある程度の配慮ができればと考え、絵画の専門的内容に偏らず、できるだけ芸術全般に関わる問題や、美術の思想や理念、様式などと音楽との共通点や相違点などについて話題を展開するよう心がけた。このため、専門外の大学院生との、しかもマンツーマンの授業でありながら、一方的な講義形式に陥ることなく比較的充実した授業展開がおこなえたのではないかと感じている。しかしながら、絵画の授業としてどの程度の許容範囲でそれらをおこなうべきかは、本授業におけるひとつの課題であると考えられる。

3. 授業アンケートの質問項目と回答

1) この授業への自身の取り組みについて（研究状況・積極性など）

A: 授業内容がとても興味深かったので、積極的に取り組めた。（具体的には、授業の中で出てきた興味深い事柄に関連した文献を探して読んでみる、など）

2) 授業内容・指導方針等について

A: 毎回事前に、授業で取り上げる作品についてのレポートが課されるので、自分自身の考えをまとめておいてから授業が受けられる。授業の中では、私にとって新しい視点からの興味深いお話がたくさん聞けて、考えがさらに発展する。発展するとともに疑問点も出てくるのだが、レポート課題については必要に応じてそういった疑問点を取り上げてくださることもあった。

臨機応変に対応していただき、本当に贅沢な授業だった。第一回目の授業を受けた頃には全く想像できなかったくらい多くのことを学ぶことができた。

3) この授業でなにを学んだか、それを今後どのように発展させたいか

A:

- ・ 演奏者の立場だけでなく、作曲者のことを考えるようになった。
- ・ 授業を受ける前は、今思うと色々な文献の色々な文章が頭の中でぐちゃぐちゃになっていて、自分が感じていることを強引に言語化してしまっていた。しかしこの授業を通して言語化した時に“ずれ”のようなものが発生していたことに気付かされ、軌道修正して下さったように思う。授業を終えてみて、（もちろん、まだまだ疑問は尽きないのだが）軸となるものが見えてきて、これから進むべき方向性がすっきりし、それが学習意欲へとつながった。

今後はもっと具体的に作品と向き合い、さらに考えを発展させていきたい。

4) 授業全般に関する要望など

A: 特にはないです。

4. まとめ

今回の授業は、他専修（音楽教育）の受講者1名というかなり特殊な状況であったが、むしろ1名のみであったことで、受講者のレベルに応じ、かつ個別の関心にも対応しつつ、授業としての一定のまとまりを得ることができたように思う。また、芸術活動としての音楽と美術に共通する問題などにも論及することで、授業内容にもひろがり生まれ、受講生の満足度も比較的高められたように感じられた。

今回取り上げた事例のように、大学院の分野別授業科目では、受講生の研究テーマや専門的な能力はその年ごとに様々である。授業内容についてもおのずと多様な要望が生じてくる可能性が大きい。今回、なんとか授業を成り立たせることができたのは、受講生が一人であったこと、美術に関するある程度の素養と関心があり、熱心な受講態度であったことなどに負うところが大きい。しかし、専門的能力の高い者と他専修の者が同時に複数受講してくる場合なども今後想定される。

受講生個々の能力・要望に沿った内容をひとつの授業としていかに実施するか、また、一定の制約の中で、受講生個々の満足度・充実度をいかに高めるかは、今後の課題である。